

### 申請書作成の一般的注意点

- ・ 論理の矛盾・破綻があってはならない。
- ・ 審査員は、必ずしも申請者の研究領域の専門家でないかもしれないことを念頭に置く。
- ・ 難しい用語を使わずに、誰もが理解できる言葉でわかりやすく書く。  
例) 「セルフマネジメント」→「自己管理」、「アンドラゴジー」→「成人教育学、成人学習理論」など
- ・ 特定分野のみで使用され、通用するような概念名を用いる場合は、本文で「定義」の説明しておく。
- ・ 強調したい部分は太字や下線で工夫をする。
- ・ 見出しをつけて太字にするなどの工夫も必要。

### 課題名について

- ・ 課題名は「疲れている審査員の目にとまる、キャッチーなタイトル」が必要である。（課題名と概要で目を引くことが大切）
- ・ 一般的、抽象的な表現は避けたほうがよい。過去の採択例の課題名を参考にKeywordを並べて語尾を整えるのもよい。
- ・ 研究の枠組みであるPICO、PECOが課題名をみてわかるようなものがよいかもしれない（課題名をみただけで研究内容がわかる）。
- ・ 患者を対象とする研究の場合は、疾患、治療、障害などを入れて、Pの部分を具体的に表すことで母集団が明確になる。
- ・ 難しい用語を使わずに、誰もが理解できる言葉で書く。
- ・ 副題をつける。
- ・ 「新規」・「革新的」などの煽り文句を入れる。

### 図について

- ・ 図は理解しやすく、説明は簡単に、要点と新規性が一目で認識できるように作る。
- ・ 図表は少なすぎても多すぎてもよくない、必要性や効率性を考える。全体の分量にもよるが、最低でも1～2ページに1個はあったほうが良い、1ページに1個は必ず、と言われる研究者もいる。ただし、「わかりにくい図表」よりは「わかりやすい文章」で伝えることが重要である。

### 自己分析をしよう

「科研費獲得の方法とコツ」（児島 将康、羊土社）に、「良くない例」が多数記載されている。自分の文章と比較して、文章力に磨きをかける。

### 1 研究目的、研究方法など

本研究計画調書は「小区分」の審査区分で審査されます。記述に当たっては、この部分は変更されること  
が多いのでよく読むこと 審査及び評価に関する規程」（公募要領18頁参照）を参考にすること。  
 本研究の目的と方法などについて、4頁以内で記述すること。  
 冒頭にその概要を簡潔にまとめて記述し、本文には、(1)本研究の学術的背景、研究課題の核心をなす学術的「問い」、(2)本研究の目的および学術的独自性と創造性、(3)本研究の着想に至った経緯や、関連する国内外の研究動向と本研究の位置づけ、(4)本研究で何をどのように、どこまで明らかにしようとするのか、(5)本研究の目的を達成するための準備状況、について具体的かつ明確に記述すること。  
 本研究を研究分担者とともに行う場合は、研究代表者、研究分担者の具体的な役割を記述すること。

#### （概要）

- ・ この概要部分が最も重要。本文内容を簡潔、的確、強調・アピールし、審査員に対して本文を読ませるモチベーションを与え、研究内容に共感させる項目である。
- ・ 概要部分は、本文との整合性が重要。申請書の全体ができあがってから一番最後に書くこと（最初に書いた場合でも必ず見直すこと）を勧める。
- ・ 「背景・問い」「目的」「展開」「研究項目」を簡潔にまとめる。「背景・問い」に4～5行、「目的」に2～3行、「展開」「研究項目」に3行といったところが適切な分量。

#### 概要部分の記載例

本邦には、変形性膝関節症患者の～（中略）が喫緊の課題である。自己管理支援の有効性は報告されているが、長期効果の検証は不十分であり、プログラムの非効率性や～が指摘されている。

本研究の目的は、変形性膝関節症患者の自己管理とQOLの向上を目指す、学習教材（テキスト、動画教材）、評価指標、運営方法をパッケージ化した患者支援システム「膝いきいきプログラム」を構築し、その効果を明らかにすることである。本研究の意義は、患者が、いつでも、どこでも、一人でも集団でも学べることができ、支援者の立場からも同じ質で援助を提供できる仕組みを構築することである。

具体的な研究項目は、(1)「膝いきいきプログラム」の学習教材を開発する、(2)学習教材の活用も含め、パッケージ化した患者支援システムの運営・指導用ガイドを作成する、(3)病院・医院に通院し保存療法を受けている患者に「膝いきいきプログラム」を実施し、介入効果を検証する、の3項目である。

背景

目的

展開

研究項目

#### （本文）

- ・ 説明文章にある要点(1)～(5)の項目を必ず入れること。

#### (1) 本研究の学術的背景、研究課題の核心をなす学術的「問い」

##### 「学術的な背景」

- ・ 申請者以外の研究者によって行われてきた研究テーマについての現状をまとめる。
- ・ 研究テーマが喫緊の課題、社会的に重要な問題であることを示すために、厚生労働省や文部科学省などの行政機関や日本看護協会などの公益社団法人が提案しているテーマであることを強調するとよい。
- ・ 次に、申請者自身がこの研究テーマに関して、これまで行ってきた研究内容や研究業績を書くことが重要である。申請者が先行して行ってきた内容や独自の研究データの一部を図（図を載せる場合は説明文を入れる）として入れることで、研究遂行能力・実現性（実行可能性）があることを示し、提案の研究課題がこれまでの研究成果に基づいていることを大いにアピールする。
- ・ 発表済みの研究結果だけでなく、未発表の予備調査のデータを入れてもよい。そうすることで、研究が進んでいて、興味深い結果が出ている印象を与え、研究計画の説得力が増す。

## 【1 研究目的、研究方法など（つづき）】

## 申請者自身のこれまでの研究プロセスの記載例

申請者らは、これまで膝 OA 患者のための評価指標を開発し、患者約 300 名を対象に、生活上の困難や自己管理能力の実態やその関連要因を示してきた（〇〇 et al. 2010, 2011, 2013, 2014）。これらの結果をもとに、患者の自己管理を支援するプログラムを設計・提供してきた。～一定の効果を挙げ、〇年現在も教室を提供し続けている。

## 「研究課題の核心をなす学術的「問い」」

- ・いま何が問題なのか、解明すべき課題は何か、未解明の問題は何か、なぜこの研究テーマに取り組む必要があるのかなど、研究の学術的問いを明確に書く。
- ・「以上から、本研究の学術的問いは～」 「この研究テーマにおける問題点は～」 などとはっきりと示す。
- ・論文でも「しかし（However）」など逆接の接続詞の後には重要なことが書かれている。「しかし」の後に未解決な点を述べ、次に、「以上から」「そこで」「そのため」と続き、「～が必要である」「～着想に至った」といったように、明確に記載する。
- ・学術的問いの設定から目的につながる記載方法もわかりやすい。

## 学術的問いの設定から目的につながる記載方法の例

そこで、本研究は、～を研究課題の核心をなす学術的「問い」として設定し、以下の方法によりこの問題を解決することを目的とする。

## (2) 本研究の目的および学術的独自性と創造性

## 「本研究の目的」

- ・「本研究の目的」は申請書のテーマであり、もっとも重要な部分である。
- ・「本研究は以下の解明を目的としている」として、①②③～と箇条書きにしてもよい。

## 「学術的独自性と創造性」

- ・重要な項目であり、シンプルにわかりやすく書く。「独自性」と「創造性」に分けて書くのもよい。
- ・「独自性」では、研究の特徴、一番の売り、他の研究者の研究とどのように違うか、などに注目して記載する。例えば、得意としているテクニックやメソッド、あるいは申請者の研究室に保有している最新の機器を駆使する、などでもよい。
- ・「創造性」では、この研究がなぜ重要なのか、何が明らかになるのか、どのようなことができるようになるのか、どのような応用が考えられるかなどを書けばよい。
- ・自分が開発した研究技術、解析手法などを駆使する研究、新しい技術、方法を強い説得力で提案する研究なども独創的な研究である。

## 「学術的独自性と創造性」の記載例

## 本研究の学術的独自性と創造性

現行プログラムには、インストラクショナルデザインに基づく“効果的、魅力的”なアプローチが含まれている。プログラムは学習者参加型で、脳科学に沿った内発的動機づけを基盤とし、脳を刺激するガニエの9教授法、バンデュラの自己効力感理論と関節症自己管理プログラム（Lorig, 2000）を援用している。さらに、プログラムの“効率性”を強化し、事業パッケージ化の考え方に基づく患者支援システムを構築する点は、非常に特色のある研究になると思われる。また、評価指標に、申請者らが日本の文化社会的背景のなかで信頼性・妥当性を確認した「生活上の困難」「自己管理能力」測定尺度を用いる点も独自性である。また、患者への意義としては、短期間・低コストで、自分のペースで自己管理の方法を学べる点である。～

【1 研究目的、研究方法など（つづき）】

本研究の学術的独自性と創造性

計画している本研究の特徴として次の点がある。

- 1) ~○○を作り出せる。
- 2) ~△△を解析でき、新たな試みである。
- 3) ~新たな要因の解明にも寄与することができる。

語尾で新規性をアピールしている

(3) 本研究の着想に至った経緯や、関連する国内外の研究動向と本研究の位置づけ

- ・この欄は、これまでの自分の研究が今回の課題申請に繋がった道筋を自らの業績を入れながら書いていく。共同研究者の業績でもよい。
- ・オリジナルな理由を書かなくてはならない。この部分では、申請者がなぜこの研究をしたと思ったのか、ぜひとも熱い思いを書く。
- ・これまでに行ってきた研究手法で実行できるのか？これまでの研究活動と準備状況や実行可能性を明示して、必ず実行できるという根拠を示しながら説明することが重要である。

本研究の着想に至った経緯の記載例

申請者らは、これまで「生活上の困難尺度」「セルフケア能力尺度」を開発し、膝OA患者約300名を対象に、生活上の困難や自己管理能力の実態やその関連要因を示した（○, J Clinical Nursing, 20(5-6)2011；○ら, 日本看護科学会誌, 33(1)2013；○ら, 日本運動器看護学会誌, 8, 2013；○ら, 日本看護科学会誌, 34, 2014）。その経験から、患者の自己管理を支援し、生活上の困難感やQOLの改善を目指す「膝いきいき教室」を設計し実施してきた。対象者の運動機能やQOL、生活上の困難感、自己管理能力に有意な改善が認められ、対象者は教室への満足感、主観的な効果をも実感していた（○et al. 投稿中）。しかし、現行教室の問題点として、①多くの支援者（講義担当者）を投入し、費用、時間の点において非効率的であること、②対象者にとっても時間を要し、体調不良時には会場までの移動が困難なこと、が挙げられた。効果的・魅力的な要素は残したまま、プログラムの簡素化・パッケージ化を図ることができれば、根拠に基づく効率的なプログラムの開発が可能になると考えた。支援者の立場からの、いつでも誰でもどこでも同じクオリティで援助を提供でき、利益をもたらす仕組みづくり、対象者の立場からの、比較的容易で一人でも集団でも学べる仕組みづくりは、今後の膝OA患者の介護予防、重症化予防に有意義なものになると考えたことから、本研究の着想に至った。

関連する国内外の研究動向と本研究の位置づけの記載例

<膝OA患者のための自己管理プログラムに関する研究動向>

膝OA患者に必要な健康行動は主に痛みの管理、栄養、運動であり（○, 2006）、厚生労働省は、膝OAの発症・重症化を予防するためには「至適運動・生活指導プロトコルの開発」を課題としている。世界的に、OAに対する運動療法を中心としその他の生活指導も含めた統合的自己管理プログラムに関する研究は既に行われており（○et al., 2018；○ et al., 2016；○ et al., 2007；○ et al., 2010）、多くの研究で、軽症～中等症の外來通院、地域在住の患者において、運動療法による疼痛緩和効果や身体機能の向上が認められることが示されている。日本においては、自治体での運動クラブや介護予防事業としての取り組みは多くみられるが、膝OAに対する統合自己管理プログラムの実験的操作、適切に定量的な評価まで実施している研究結果は少ない。また、海外のプログラムでは、自己効力感理論や自己制御理論などの認知行動アプローチを援用し、行動変容やQOL向上ももたらすことが明らかにされ（○ et al., 2016；○ et al., 2007）、介入が“効果的”であることは示唆されている。しかし、プログラムが高齢者にとって魅力的ではないこと、高いドロップアウト率、プログラム期間中はホーソン効果が働くが、プログラムが終了すると、患者の多くは積極的な姿勢を維持することが難しくなることが指摘されている。患者が自ら健康行動を継続するためには、彼らの生活（文化、環境などに影響する）に適し、いつでもどこでも自分のペースで実施可能な“効率的・簡便”な患者支援システムを開発し、生涯にわたる健康行動の習慣化をサポートする必要がある。さらに、支援者の立場から、いつでも誰でもどこでも同じクオリティで援助を提供でき、低コストで効率的に利益をもたらすパッケージ化されたプログラムの開発が必要であるが（○, 2015；○ら, 2010）、実際に、そのような取り組みはまだ存在していない。～（省略）

- ・国内外の研究の進捗状況を鑑みても、提案課題は新規性が高いことを具体的に強調する。
- ・国内外の研究の動向を書くとともに、実際の研究者名をあげて説明するのもよい。  
例）「共同研究者の○○教授は、～」など。
- ・この分野の研究テーマであれば、必ず読んでおかなければならないゴールドスタンダードともいえる論文を必ず入れる。

【1 研究目的、研究方法など（つづき）】

(4) 本研究で何をどのように、どこまで明らかにしようとするのか

- ・ 研究計画の全体がわかるような全体図や研究のロードマップを用いるとよい。年度と月のクロス表で研究期間全体のスケジュール表やフローチャートを提示するのもよい。
- ・ 図表を用いるとわかりやすい。例えば、全ての研究においては、時系列のスケジュール、介入研究の場合は介入プログラムの内容など、観察研究の場合は、研究の概念図、質的研究であれば、面接ガイドや分析フォーマットなどを図化したものを載せてもよい。

ロードマップの例

研究目的を達成するために以下の3つの研究を実施する。

- #1 「膝いきいきプログラム」の学習教材（テキスト、動画教材、膝手帳）の開発
- #2 パッケージ化された「膝いきいきプログラム」の構築と運営・指導用ガイドの作成
- #3 上記2つの「膝いきいきプログラム」の実施と介入効果の検証

表○ ロードマップ

ロードマップ	令和2年	令和3年	令和4年	令和5年	令和6年
#1 動画・テキスト作成					
#2 運営マニュアル作成					
#3 プログラム検証					
#4 論文化・学会発表等					

- ・ 初年度の計画と次年度以降の計画に分けて書くこと。採択されたらすぐに研究をはじめることができるように、初年度の研究計画はとくに念入りに書くこと。
- ・ 研究計画の欄は、実施可能性をみられている。特に、研究の具体的な解析方法は、各解析担当者名を入れながらまとめていく。サンプルサイズ、用いる検定なども書ける範囲で記載しておく。質的研究については、単に「グラウンデッド・セオリー」「内容分析」「KJ法」、といった分析方法の記載だけでなく、簡単な分析過程を記述する。実施可能な知識、スキルを持っているかも判断される。
- ・ 質的研究の場合は、面接ガイドや具体的な分析手順をわかりやすく書く。質的研究は、社会学、哲学、文化人類学などの分野によってそのパラダイムや特徴が異なるため、なぜその方法を選択したのか、根拠を書くようにする（背景や独自性に記載する場合もある）。

研究計画の記載例

初年度（令和○年）： #1○○○○

～

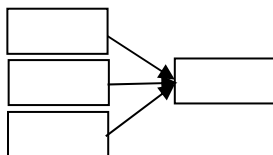
令和△年： #2△△△△

～

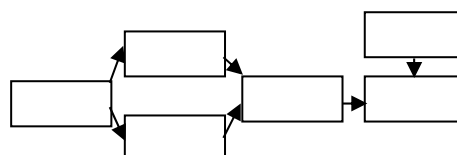
令和□～◇年： #3 上□□□

表○ 研究のスケジュールの例

観察期間		介入期間	フォローアップ期間		
4週間		4週間	3か月間	3か月間	6か月間
IC取得 ベースライン調査①	集団介入・個人介入 介入直前調査②	介入終了直後③	調査④	調査⑤	調査⑥



(重回帰モデルの例)



(パス解析モデルの例)

図○ 研究の枠組み・概念図の例（図には説明文をつける）

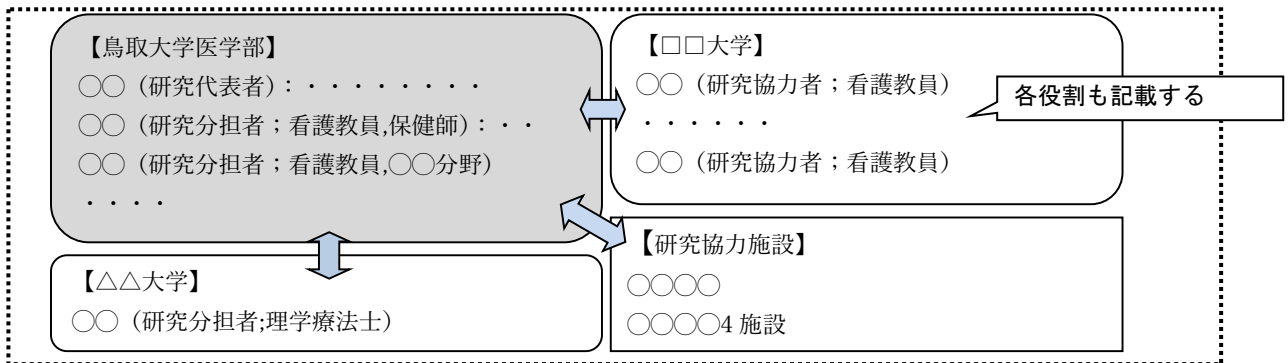
- ・ 研究が当初計画通りに進まないときの対応を書く。計画した調査や実験は、実際にやってみないとわからないことも多く、研究とは得てして計画通りに進まない。

【1 研究目的、研究方法など（つづき）】

例) 研究協力者として、〇〇氏を迎えることで最新の情報を得ることができ、万一研究が進まない場合も研究計画を修正することが可能であり、本研究は十分に実行可能である。

- ・ 研究計画を遂行するための研究体制を書く。
- ・ 研究代表者、研究分担者の具体的な役割は図表を用いて書いておく。
- ・ 各研究者が持つテクニックやメソッドが研究計画の遂行に不可欠であることを明記しておくことで、計画の実現性に説得力が増す。

研究体制、具体的な役割の記載例



(5) 本研究の目的を達成するための準備状況

- ・ 予備的な実験データや調査結果が出ていれば、それを紹介しておくといよい。
- ・ 「このように研究が進展している」ので、本研究計画は「実施可能」だとアピールする必要がある。
- ・ 研究計画に必要な機器類や研究遂行の知識、スキルのレディネス（〇〇理論の研修を受けているとか、〇〇研究の分析方法に関連する研修を受けている、〇〇の資格を持っているなど）、人的資源などを記載しておく。
- ・ 機器類がまだ手元にない場合は、その入手計画や方法を具体的に書いておく。

## 2 応募者の研究遂行能力及び研究環境

応募者（研究代表者、研究分担者）の研究計画の実行可能性を示すため、(1)これまでの研究活動、(2)研究環境（研究遂行に必要な研究施設・設備・研究資料等を含む）について2頁以内で記述すること。

「(1)これまでの研究活動」の記述には、研究活動を中断していた期間がある場合にはその説明などを含めてもよい。

### (1) これまでの研究活動

・この欄では、申請者のこれまでの研究活動を書いて、申請者の「研究遂行能力」、つまり今回の研究計画が実現可能であることを示す。下記の①～④を意識するとよい。

- ① 論文で示す：特に過去5年間の業績を中心に記載する。
- ② 学会発表で示す：今回の研究との関連を触れておくこと。
- ③ 研究助成の成果で示す：科研費や民間財団の助成金などによって、どのような研究成果をあげてきたのかを記載する。
- ④ その他：重要な研究業績は、「研究目的、研究方法など」「本研究の着想に至った経緯など」の本文中でもアピールする。

### これまでの研究活動の記載例

#### 膝OA患者の介入評価指標の開発と実態調査

膝OA患者の生活上の困難感には地理的・文化的背景が反映していると考え、膝OA患者の面接調査を経て、約300名を対象とし、生活上の困難尺度を開発し、生活上の困難を測定する3因子14項目の尺度の有用性、信頼性・妥当性を検証した (Tanimura C, J Clinical Nursing, 20(5-6)2011)。さらに、～（中略）が患者の「生活上の困難」を起こしている要因であることが示唆された（谷村ら, 日本運動器看護学会誌, 8, 2013）。同様に、5因子20項目の自己管理能力尺度を開発し（谷村ら, 日本看護科学学会誌, 33, 2013；谷村ら, 日本看護科学学会誌, 34, 2014）、自己管理能力とQOLとの間に有意な相関があることを確認し、～（中略）。

1. Tanimura C, Morimoto M, Hiramatsu K, Hagino H: Difficulties in the daily life of patients with osteoarthritis of the knee: scale development and descriptive study. *J Clin Nurs* 20:743-53,2011. doi: 10.1111/j.1365-2702.2010.03536.x.
2. ...
3. ...

#### ロコモ疫学調査および地域在住高齢者の自己管理能力の実態調査

平成26年度より日本運動器科学学会プロジェクトの助成金を受け、鳥取県中山間地域にて「ロコモ発生・悪化リスク因子に関する疫学調査」を開始した。結果として、ロコモや自己管理能力の欠如によりフレイルに陥りやすいこと (Tanimura C, Matsumoto H, Nurs Health Sci. 20(1)2017)、自己管理能力を獲得することで、運動など健康行動を促進する可能性 (Tanimura C, Matsumoto H, Yonago Acta Medica. 62, 2019) を示した。～（中略）。その他、分担研究者筆頭のロコモ・転倒予防をテーマとした研究論文を多々公表してきた。

1. Tanimura C, Matsumoto H, Tokushima Y, Yoshimura J, Tanishima S, Hagino H: Self-care agency, lifestyle, and physical condition predict future frailty in community-dwelling older people. *Nurs Health Sci* 20:31-38,2017. doi: 10.1111/nhs.12376.
2. ...

#### 膝OA患者の自己管理行動とQOLの促進を目指した「膝いきいき教室」の実施と評価

これまでの研究結果に基づき、患者の自己管理を支援する対面型「膝いきいき教室」を設計・提供してきた。教室は教育活動の効果・効率・魅力を高める学習環境を設計するID（鈴木、2005）と自信や意義を高めるための自己効力感理論に基づき設計し、2019年現在も患者に実施し継続している。42名の参加者が参加した。教室の内容は、自分の体を知る、疾患の基礎、痛み、食事、運動の管理、ストレス管理、～（中略）。結果として、自己管理能力、QOL、痛み、運動機能、生活上の困難感の改善が認められた (Tanimura et al., 2022)。

1. ...

これらの研究は、○○、○○、および○○などの研究助成によって行われてきた。

申請者のこれまでの研究活動の概要

古い論文でも今回の研究の基礎となっているもの

雑誌名を目立たせたい場合は太字にする

直近5年間の発表論文をあげて研究の継続をアピール

これまでに支援を受けた科研費や民間助成財団を示す

- ・業績がない場合は、正直に「（業績は少ないが）この計画を行うのに十分なテクニックをもっている」と別の場所（本文や準備状況）に記載してアピールをする。研究論文や学会発表など記載する業績がない場合でも、研究報告書や公開情報などがあれば、別の場所に記載する。
- ・業績が少ない場合には、論文業績を有する研究者を分担研究者に迎えることもあるが、重要なことは、研究代表者の業績のみが大きく評価されることである。逆に研究分担者の方

【2 応募者の研究遂行能力及び研究環境】

が研究代表者よりも業績が多く記載されていると、マイナスイメージをもつ審査委員もいるので、業績量のバランスを考えて書く。

- ・ これまでの研究業績をリサーチマップに登録することが重要！

(2) 研究環境

- ・ 申請者の研究計画に必要な機器や設備が整っているのか、研究に必要な試料や資料は保有しているのかなどを書く。
- ・ もし機器や設備が整っていないときには、その対処方法を書く。例えば、「〇〇大学」のものを借りて測定する。」など、できるだけ具体的に書く。
- ・ 研究環境は採択と同時に研究が実施できる環境になることを書く。

研究環境の記載例

申請課題は、〇〇県〇〇市で実施する。研究環境としては、〇〇市の〇〇外科、〇〇外科、〇〇外科、〇〇外科の4医院から60名の対象者を集めることができる。また、〇〇市〇〇課の協力を得て、〇〇市が運営する会場にて教室や測定を行うことが可能である。上記の協力機関とは、2015年よりすでに共同で現行の「膝いきいき教室」と身体測定を開催してきた経緯があり、引き続き新たな研究対象者の募集が可能である。

研究設備については、測定に必要な体組成計、骨密度計などは鳥取大学医学部の設備を使用する。テキスト、動画（web配信、DVD、ブルーレイ）作成にあたって依頼する業者も既に決定（〇〇〇〇）しており問題はない。

研究分担者は、医師で申請者の所属する大学の教員であり、〇〇に関する研究を行っており（〇〇〇〇）、専門的な観点からデータ解釈、技術的アドバイスなどの支援を受けられる。また、〇〇看護学領域の研究実績を持ち、保健師資格をもつ大学教員（〇〇〇〇）、〇〇看護学を専門とする大学教員（〇〇〇〇）が分担研究者である。また、教材開発・運動指導動画の作成には、運動関連に関する専門的知識・技術を持つ理学療法士で〇〇大学の〇〇〇〇が携わる。保健教育関連の実績を持つ〇〇大学〇〇部の教授（〇〇〇〇）が監修に加わる。

また、研究代表者（〇〇〇〇）は、開発途上国においても幅広い生活習慣病に関する分野の保健教育に従事しており、これまでの経験から学んだ学習理論を用いたプログラム開発に寄与することができる。その他、研究協力者として、各医院の看護師、運動指導療養士、〇〇市職員の助言を仰ぐことができる。測定時は、大学院生や研究協力者に依頼できる。

以上のことから、設備、人的にも本研究に必要な体制が整っており、すぐにでも研究を開始できる体制が整っている。

人的資源を環境の一部として記載しているが、この内容は、図とともに、研究体制と具体的役割の欄に記載してもよい



### 3 人権の保護及び法令等の遵守への対応（公募要領4頁参照）

本研究を遂行するに当たって、相手方の同意・協力を必要とする研究、個人情報の取扱いの配慮を必要とする研究、生命倫理・安全対策に対する取組を必要とする研究など指針・法令等（国際共同研究を行う国・地域の指針・法令等を含む）に基づく手続が必要な研究が含まれている場合、講じる対策と措置を、1頁以内で記述すること。

個人情報に伴うアンケート調査・インタビュー調査・行動調査（個人履歴・映像を含む）、提供を受けた試料の使用、ヒト遺伝子解析研究、遺伝子組換え実験、動物実験など、研究機関内外の倫理委員会等における承認手続が必要となる調査・研究・実験などが対象となります。

該当しない場合には、その旨記述すること。

#### 記載例

本研究は「個人情報保護法」や「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」等に基づき対象者の人権尊重、社会的影響について配慮し、倫理的問題に対して必要な対応と措置を講じるものとする。研究倫理は社会の側の受け止め方に大きな影響を及ぼすため、研究者の社会的責任、対象者の人権の尊重、プライバシーの保護、対象者の不利益への配慮などに研究開始から終了まで備え、対象者の信頼および社会的理解の上に研究が成立することを自覚する。対象者側の同意・協力・個人情報の取り扱い、生命倫理・安全対策・法令遵守の手続き、講じる対策と措置を以下に示す。

#### （人権の尊重）

研究対象者の人権を最大限に尊重し、インフォームド・コンセントを実施し、法令を遵守する。

#### （プライバシーの保護）

「個人情報保護法」や「鳥取大学個人情報保護の取扱規則」を遵守し、研究対象者のプライバシーの保護に最大限留意する。研究結果を公表する際は、個人が特定されない処理をした上での開示とする。

#### （公正と信頼の確保）

鳥取大学医学部倫理審査委員会規則に基づき、研究の公正性、社会の信頼を確保し、対象者に不利益が生じないように留意する。

#### （研究資金の適正な取り扱い）

研究資金は科研費ルールに沿って適正に取り扱う。

#### （安全の確保）

本研究は、対象者の安全を確保するために〇〇市〇〇課、対象医院・病院と連携し、緊急対応に備える。本研究のプログラムには運動療法が含まれているが、対象者の安全性を考慮して、救急セット、お茶・飲料水などを準備する。

研究代表者及び研究分担者は対象者に十分な説明を行った上で、研究への参加について自由意志に基づく同意を文書で得る。研究説明について、目的と方法・概要、研究参加によってもたらされる利益および不利益、プライバシーは最大限に尊重されること、データは統計的に処理し個人は特定されないこと、研究への参加は自由意思であること、研究の同意をいつでも撤回できること、研究参加の有無が診療・治療に一切影響しないことを口頭ならびに文書で説明する。同意書への署名をもって最終的な意思を確認し、同意の得られた者に対して研究を実施する。データは鍵付きのキャビネットに5年間保管する。研究終了後データは速やかに破棄する。

**4 研究計画最終年度前年度応募を行う場合の記述事項**（該当者は必ず記述すること（公募要領26頁参照））

本研究の研究代表者が行っている、令和4（2022）年度が最終年度に当たる継続研究課題の当初研究計画、その研究によって得られた新たな知見等の研究成果を記述するとともに、当該研究の進展を踏まえ、本研究を前年度応募する理由（研究の展開状況、経費の必要性等）を1頁以内で記述すること。  
 該当しない場合は記述欄を削除することなく、空欄のまま提出すること。

研究種目名	課題番号	研究課題名	研究期間
			平成 年 度～令和 4年度

当初研究計画及び研究成果

前年度応募する理由